

## The Miller's Prologue and Tale と "hende Nicholas"

佐々木 富美雄

外国語教室

(1977年9月10日受理)

*The Miller's Prologue and Tale and "hende Nicholas"*

Fumio SASAKI

Department of Foreign Languages

(Received September 10, 1977)

In this essay I tried to describe how Geoffrey Chaucer did try to digress from the artificialities of stultifying rhetoric, that is, to create the new method to communicate his true spirit. And this new method was based upon the close and minute observations of his own social customs and his neighbourhood, and that he knew about them completely. So I tried to explain about this method through "hende Nicholas" of *The Miller's Tale*, in which we may observe that the implications of "hende" are the most important key-word to the true understanding of this poem.

## 【I】

Chaucer (1340?~1400)の晩年、10年間は詩人としての技量が最高潮に達した時であり、かつ人間的にも、また社会を観察したり人生を思うその姿において円熟期にあった事と考えられる。年代的には1386年から1389年にかけて *The Legend of Good Women*, 並列的に 1387年~92年にわたって *Canterbury Tales* に対する *General Prologue* とこの *Canterbury Tales* 主体そのものの一部それに *Astrolabe*が 1391年~92年と続くのである。そして1393年~1400年の期間に *Canterbury Tales* の後半が物されているということになる。<sup>1)</sup>

これらの年代から推察すると *The Miller's Prologue and Tale* はこの円熟期に出来上がったものと考えられる。それに加えて *The Miller's Tale* はこうした Chaucer の人間的、かつ詩人という立場から推察する時に今以上に "Social Status" の厳しい世の中に *Knight's Tale* の後にこの物語を持って来たことは意味のあることだと思われる。人間が作り出している社会には色々な意味合い

において "order" があるであろう。しかし人間の生から死に至る進行の過程を一つと考える時に、この人生の遅速には "order" はなく、中世にあっては特に Fortune によって左右されていた世界である。馬上の姿も定まらぬ程までに酔眼朦朧とした粉屋が名乗り上げ大工をあげつらい、それに続けて家扶のオズワルドが直ぐに仕返しをする時 "at random" な "order" つまりこの人生の写しである "order" が確立したと見るべきであると考え。<sup>2)</sup>

しかしこの "at random" な "order" の中に重要な事実がある。それは Chaucer は役目として各々の登場人物の言葉をそのままに伝える事が仕事であるとし、"I moot reherce/His tales alle, be they bettre or werse" (A 3173~74) と言っている。そして "And therefore, whoso list it nat yheere,/Turne over the leef and chese another tale;" (A 3176~77) と訴えている。その気になれば多くの "storial thyng that toucheth gentillesse," (A 3179) を知っていると決めつけている。それは Winny も述べている如く、Chaucer の出るべくして出た力の結果であり *Knight's Tale* の "gentillesse" なものへの真の

1) F.N. Robinson: *The Works of Geoffrey Chaucer* Second Edition 1957 Oxford 以下引用または数字等はこの版による。本論中にあるイタリック体は私のものである。

2) James Winny: *The Miller's Prologue and Tale* Reprinted Edition 1975 Cambridge University Press p.1. Introduction

“quite”(A 3119)の意図する所ではなかったろうか<sup>3)</sup>。つまり意図的な“digression”であり同時にこれが *Knights Tale* に対する呼応となっていることである。図式化された社会から離脱の傾向は Chaucer の用いた fabliau の世界とその言語に見ることが出来る。その fabliau の特徴が登場人物の行動そのものと物語の諧謔性にあるとするならば、この意味においては *The Miller's Prologue and Tale* は正しくこの定義にぴったりとするものである。この姿を本論では登場人物の二人の“clerk”のうち“hende Nicholas”を中心に“hende”の意味の変化と共にどのように展開して行くのかを追って見たい。

## 【Ⅱ】

さて次にこの *The Miller's Tale* の構成について考えて見たいと思う。Fabliau の特徴が行動そのものと物語の諧謔性の中にあるといったが、この事から登場する人物を見ると眼に見えるが如く plot が図式化されて来る。それは Charles Muscatine が主張する如く—“The fabliau's preference for physical action becomes an ethical imperative. Even the stock triangle of fabliau—the lecherous young wife, the jealous husband, and the clever clerk (here two clerks)—is a self-assertive vehicle for the purest fabliau doctrine, the sovereignty of animal nature.”<sup>4)</sup> —余りにもこの登場人物の行動は明々白々である。人物からして全部が名前も姿もすべてが Chaucer によって明らかにされている。

- 1) John 老木工
- 2) Alisoun 18歳の若く美しい妻
- 3) Nicholas (Nicholay) 老木工の所に下宿している学生
- 4) Absolon 若僧
- 5) Robyn 粉屋の下僕
- 6) Gille 粉屋の下女
- 7) Gervys 鍛冶屋

これが登場人物である。つまりは Muscatine のいう‘lecherous young wife’, ‘jealous husband’, それに ‘clever clerk’ (これは二人いるのだが) の四人がそれぞれに役割を果すわけである。この老木工は *General Prologue* によると次のように書かれている。

At wrastlynge he wolde have alwey the ram.  
He was short-sholdred, brood, a thikke knarre;  
Ther was no dore that he nolde have of harre,  
Or breke it at a rennyng with his heed.  
(G.P.: 548~51)

これ程にがっちりした男でかつ赤いもじやもじやの髪や鼻に疣 (wert) があって、しかもその上に “a toft of herys” とある。つまり彼の「ひげ」は “sone or fox” のように赤い、このことは彼の性格が不正な手段をもって相手を欺いたり、騙したりする人間であることだ。つまり次のようにこの部分は描写されている<sup>5)</sup>。

Upon the cop right of his nose he hade  
A wert, and theron stood a toft of herys,  
Reed as the bristles of a sowes erys;  
(G.P.: 554~56)

つまりこれは“性格”が cunning であるが極めてその性質は“simple”だということである。中世の人相学から判断しても余り好ましくない大工の John であるということが出来る。それが身分不相応なピチピチ跳ねたり踊ったりする美しい若妻と一緒にになったのだから尋常様では取まりが付かないのが当然の事である。この取まりの付かない事がこの物語の筋である。しかし普通の結末ではない所に fabliau の精神が生きてくることとなるのだ。つまり二人の‘clerk’, 学生と若僧の三角関係が生れてくる。老木工と若妻のアンバランスは大工に対する仕返ししの次の *The Reeve's Tale* の粉屋の血筋の高貴な女 (実は牧師の娘なのだが) と一緒にしたことと対応している。このアンバランスのバランスが *The Canterbury Tales* の中における“linking”というべきものなのであろう。そして粉屋はこの *The Reeve's Tale* の中にあっては学寮の粉を掠め取るどころか、御自分の「高貴な血筋」の妻を寝取られ、娘は傷物にされるという *The Miller's Tale* と正反対な話である。

さて前述した如く怪物の老木工 John と結婚した運命は明白であった。この若妻 Alisoun の性格は実によく、彼女の動作がはっきりと読みとれるような表現で私共の胸を打つようになっている。第一に“weasel” (いたち—狡猾を代表する), 次に“wether” (雌の羊—こ

3) James Winny: Op. cit., p.2.

“In *The Miller's Prologue* a masterful impulse is seen elbowing its way to the front, and silencing the poet's misgivings by the kind of thrusting energy described in the portrait of the Miller, which speaks of his ability to break down doors “at a rennyng with his heed.”

4) Charles Mustcatine: *Chaucer and the French Tradition A study in Style and Meaning* 1964 University of California Press p. 224

5) W.C. Curry: *Chaucer and the Medieval Science* Oxford University Press 1926 p. 80ff.

れについては説明の要はなからう), また “swallow”, “kid” (子やぎ), “calf”, “bird” それに “mouse” などである<sup>6)</sup>。従って二人の “clerk” のうちの一人 “This Absolon, that jolif was and gay,” は特に教会内でも特に大工の若妻に眼をかけるのである。

To looke on hire hym thoughte a myrie lyf,  
She was so propre and sweete and likerous.  
I dar wel seyn, if she hadde been a mouse,  
And he a cat, he wolde hire hente anon.

(The Miller's Tale: A 3344~47)

これはなんと Alisounを言い当てていることであろうか。若しも Absolon が“ねこ”で Alisounが“ねずみ”であるなら “hente” するという —つまり捕えるというのだ。しかしこの若僧が捕え得る程の実力がない。Nicholas が実に大いなる決断力で行動するのに反していつでも虚飾的であり、意図的に “gentillesse” と “curteisye” を重んじているのである。つまり “honour” を尊重することになる。この “honour” を尊重するが故に、また nobleness なるがために行動を規制され己れの目的に飛びつくことの出来なかった人間に Chaucer の創り出した世界では有名な *Troilus and Criseyde* の Troilus がいるわけである<sup>7)</sup>。The Miller's Tale では Absolonは fabliau の世界において重要な役割を果している。Troilus は相手を確かに打ち取るが己れもまた第八天へと昇るわけだ。この Absolon も常に “he=jolif (または 'joly') and amorous” で叙述されているがやはり技巧的であり、それは余りにも “romantic” な態度では “いたち” のような Alisounは捕えることは出来ないという事である。これはかなりきつい諧諷であることが知れる。

勿論色々と考えた末にどうしてつもの思いを打ち明けようと Alisounの窓辺に忍び寄る時はもう既に Nicholas は Alisoun を物にしており、大工は “神の秘密” (Goddess privetee) を知りすぎて、つまり Nicholasの星占によって天井に大きな桶をつるしその中に高軒という状態である。ここに至って老大工 John が 3423 行で “hath greet merveylye” つまり「大いに不思議である」

と思ったことがこの {fabliau の始まりであり、それと同時に彼は “This sely carpenter” と呼ばれ始めるのである。General Prologueにおいて「赤いもじゃもじゃの髪や鼻に疣」があるとあったが、実はこの性格は極めて「単純な人間」とある<sup>8)</sup>。この事から考えると “sely” は “happy” または “good” の意味でありアイロニーとして受取れば “innocent” だという事が出来る。“innocent” であるが故に “happy” であり “jolly” つまり “merrily” にすごすことが出来たのだ<sup>9)</sup>。この John が眼覚めるのは Absolonが Alisoun の大変な所に kissをする事によって彼もまた眼覚め、Gervys から赤熱した鋤の頭をかりてき、それを Nicholas に押しつけるその時である。“Water!” 「水だ！」という声で眼覚めるわけである。Nicholas の占星によって「第二のノアの洪水」が予告されていたわけである。

「第二のノアの洪水」が予告されていた事、すなわち Nicholas の計略にかかったことになるわけだが、この計略を見破ることが出来なかったという事がつまりはこの大工 John が “This sely carpenter” ということになるのである。あとは吾々が良く知っている結末となる。ここまで来て考えるとこの *The Miller's Tale* の明確な plot は Nicholas による Alisoun の “secret love” (余りにも明々白々で secret でもないのだが) であろう。つまり “deerne love” をめぐっての話ということになる。次の粉屋に対する仕返しもまた同じ話の異なった plot を持つものといえるのである。

このようなテーマをどんな方法で Audience に伝えるかが問題である。Alisoun は動物のイメージを持って彼女の性格が一部始終が知れるように記述されていた<sup>10)</sup>。また Absolon は “jolif and amorous” で述べられ、大御所の老大工 John は “sely” で表出されていた。

さて残った Nicholas はどうなのであろうか、勿論、J. Richardsonによると “Nicholas facetiously speaks of the old carpenter swimming as merrily as a duck after a drake (3576); Absolon is compared to a goose (3317), a cat (3347), a nightingale (3377), and an ape (3389), and he likens himself to a lamb (3704) and a turtle dove (3706).”<sup>11)</sup> といっている。

6) Janette Richardson: *BLAMETH NAT ME A Study of Imagery in Chaucer's Fabliaux* Mouton 1970 p. 161

“The frank animality of the tale, which stems not only from the gross action throughout but also from the gaiety of its enactment, is substantial by numerous similes comparing the characters to a wide variety of birds and beasts. As in *the Reeve's Tale*, Chaucer here uses figurative impressions to verify what the participants' deeds are to reveal.”

7) 拙論 *Troilus and Criseyde* の文体 (1) 名工大学報第26巻 1974 pp. 27~33

8) W.C. Curry: Op.cit., p. 80

9) F. H. Stratmann: *A Middle English Dictionary*. 'hende'

10) Janette Richardson: Op. cit., p. 161

11) Janette Richardson: Op. cit., p. 161

しかし Nicholas は例外である。

Nicholas には何がつけられているのであろうか。それは "hende" がつけられている。この "hende" は仲々把握し難い語である。しかし今迄のことを考えながら "hende" を把握しようとする時この形の変った "Courtly love" の極めて実践的かつ実利的な姿をとっているこの *The Miller's Tale* には "gentillesse" は必要ではなかった。むしろこのように直接的な表現のもとにもっと大衆的なかつ世俗的な人物を利用する事によって Chaucer の規範的世界からの進展が見られたのだと解釈したい。このテーマを *The Miller's Tale* という枠組の中に入れて聞かせる時に内容的な事もさることながら、どんな key-word を用いて訴えたのであるかが興味を中心になって来る。それは Joseph Mersand も数字で示しているように Romance words が *The Miller's Tale* の場合極めて小さくこの作品において 26.67% である<sup>12)</sup>。この事は Chaucer が通常ロマンス語を 30~40% の範囲内で使い直接ラテンまたはフランスの source がある時には 60% にまでロマンス語の使用度が上がっていることを示しているのである。*The Miller's Tale* や *The Reeve's Tale* にはそれがなく、26% と 21% ということである。この % は *The Knight's Tale* の 40.40% に比較すると明瞭であろう。

しかしここでは *The Miller's Tale* において全体の構成上どんな key-word, つまり聞き手が一つの knot として理解する上の手掛りとなるべきものを通して考えて見たい。それはこの物語に登場してくる 7 人にどんな呼びかけがなされているのか。それはどんな事を意図するのかという事だ。Chaucer は *The Knight's Tale* のような規範的な世界から脱出しようとした。それは内容的にも言語的にもである。それはまた Chaucer の文体的展開であり、人間としての見る眼の確かさが加わり、人間として円熟して来た事を物語っているということが出来る<sup>13)</sup>。

さてその key-word なるものを見てみよう。この 7 人を *The Miller's Tale* 全体を通して並べてみると次のようになる。

*Nicholas, Absolon, Alisoun, Robyn, Gille, Gervys and John*

1. This clerk was cleped *hende Nicholas*. (A 3199)
2. That on a day *this hende Nicholas*, (A 3272)

3. Why, lat be," quod she, "lat be, *Nicholas*, (A 3285)
4. *This Nicholas* gan mercy for to crye, (A 3288)
5. 'Nay, ther-of car thee noght,' quod *Nicholas* (A 3298)
6. Whan *Nicholas* had donn thus everideel, (A 3303)
7. The which that was y-cleped *Absolon*; (A 3313)
8. *This Absolon*, that jolif was and gay, (A 3339)
9. This parissh clerk, *this joly Absolon*, (A 3348)
10. And *Absolon* his gyterne hath y-take, (A 3353)
11. 'What *Alison*, herestow nat *Absolon*, (A 3366)
12. Fro day to day *this joly Absolon* (A 3371)
13. She loveth so *this hende Nicholas* (A 3386)
14. That *Absolon* may blowe the bukkes horn, (A 3387)
15. And thus she maketh *Absolon* hire ape (A 3389)
16. Doun of the laddre stalketh *Nicholay*, (A 3648)
17. And *Alisoun* ful softe adoun she spedde; (A 3649)
18. And thus lith *Alisoun and Nicholas*, (A 3652)
19. This parissh clerk, *this amorous Absolon*, (A 3657)
20. Ful prively after *John the carpenter*; (A 3662)
21. *This Absolon* ful joy was and light, (A 3671)
22. To *Alison* now wol I tellen al (A 3678)
23. Up rist *this joly lovere Absolon*, (A 3687)
24. 'What do ye, *hony-comb, sweete Alisoun*, (A 3698)
25. Wel bet than thee, by Jhesu, *Absolon*, (A 3711)
26. 'Allas,' quod *Absolon*, 'and welaway, (A 3714)
27. 'Ye certes, lemman,' quod *this Absolon*. (A 3719)
28. And unto *Nicholas* she seyde stille, (A 3721)
29. *This Absolon* doun sette hym on his knees, (A 3723)
30. *This Absolon* gan wyepe his mouth ful drie: (A 3730)
31. And *Absolon* hym fil no bet ne wers, (A

12) Joseph Mersand: *Chaucer's Romance Vocabulary* Kenikat Press 1939 Cf. pp. 75~78  
'VIII The Romance Element in Chaucer's Vocabulary'

13) E. Talbot Donaldson: *Speaking of Chaucer* Athlone Press 1970 Cf. p. 14

- 3733)
32. And *Absolon* gooth forth a sory pas. (A 3741)
33. 'A berd, a berd!' quod *hande Nicholas*, (A 3742)
34. *This seyl Absolon* herde every deel, (A 3744)
35. But *Absolon*?—that seith ful ofte, 'Allas! (A 3749)
36. Until a smyth men cleped *daun Gerys*, (A 3761)
37. *This Absolon* knokketh al esily, (A 3764)
38. And seyde, 'Undo, *Gervys*, and that anon.' (A 3765)
39. 'What, who artow?' 'It am I, *Absolon*.' (A 3766)
40. 'What, *Absolon*! For Cristes sweete tree. (A 3767)
41. *This Absolon* ne roghte nat a bene (A 3772)
42. Than *Gerveys* knew, and seyde, 'Freend so deere, (A 3775)
43. *Gervys* answerde, "Certes, were it gold, (A 3779)
44. 'Ther-of,' quod *Absolon*, 'be as be may, (A 3783)
45. *This Alison* answerde, 'Who is ther, (A 3790)
46. I am *thyn Absolon*, my deerelyng. (A 3793)
47. *This Nicholas* was risen for to pisse, (A 3798)
48. And ther-with spak this clerk, *this Absolon*; (A 3804)
49. For though that *Absolon* be wood or wrooth, (A 3394)
50. *This nye Nicholas* stood in his lighte. (A 3396)
51. Now bere thee wel, *thou hende Nicholas*, (A 3397)
52. For *Absolon* may waille and synge, allas! (A 3398)
53. And *hende Nicholas and Alisoun* (A 3401)
54. That *Nicholas* shal shapen hym a wyle (A 3403)
55. *This Nicholas* no lenger wolde tarie, (A 3409)
56. If that he axed after *Nicholas*, (A 3413)
57. That *Nicholas* stille in his chambre lay, (A 3420)
58. Of *Nicholas*, or what thyng myghte hym eyle, (A 3424)
59. It stondeth nat aright with *Nicholas* (A 3426)
60. 'What! how! what do ye, *maister Nicholay*? (A 3437)
61. *This Nicholas* sat gapyng ever uprighte, (A 3444)
62. Me reweth soore of *hende Nicholas*! (A 3463)
63. Whil that thou, *Robyn*, hevest of the dore; (A 3466)
64. *This Nicholas* sat ay as stille as stoon, (A 3472)
65. "What! *Nicholay*! what, how! what, loke adoun! (A 3477)
66. And atte laste *this hende Nicholas* (A 3487)
67. *This Nicholas* answerde, 'Fecche me drynke; (A 3492)
68. *This Nicholas* his dore faste shette (A 3499)
69. He seyde, "*John*, myn hooste lief and deere, (A 3501)
70. 'Now, *John*,' quod *Nicholas*, 'I wol nat lye, (A 3513)
71. And shal she drenche? Allas, *my Alisoun*! (A 3523)
72. 'Why, yis, for God,' quod *hende Nicholas*, (A 3526)
73. 'Hastou nat herd,' quod *Nicholas*, 'also, (A 3538)
74. But *Robyn* may nat wite of this, thy knave, (A 3555)
75. Ne eek *thy mayde Gille* I may nat save; (A 3556)
76. Thanne wol I clepe 'how *Alisoun*, how *John*, (A 3577)
77. And thou wolt seyn, "Hayl, *maister Nicholas*! (A 3579)
78. To drenchen *Alisoun*, his hony deere. (A 3617)
79. "Now, Pater-noster, clom!," seyde *Nicholay*, (A 3638)
80. And 'Clom,' quod *John*, and 'Clom,' seyde *Alisoun*. (A 3639)
81. *This Nicholas* anon leet fle a fart, (A 3806)
82. And *Nicholas* amydde the ers he moot. (A 3810)
83. Up stirte hire *Alison and Nicholay*, (A 3824)
84. With *hende Nicholas and Alisoun*. (A 3832)
85. And *Absolon* hath kist hir nether ye; (A 3852)
86. And *Nicholas* is scalded in the towte. (A 3853)

以上のようになる。Chaucer は *The Miller's Tale* では "hende" を 10回使っており、*The Reeve's Tale* の Prologue に一度あるのは *The Miller's Tale* との連なかりに効果的である。

Whan folk hadde laughen at this nyce cas  
Of Absolon and hende Nicholas,  
Diverse folk diversely they seyde,  
But for the moore part they loughe and pleyde.  
(The Reeve's Prologue: 3855~3858)

“hende” を媒介とする “at this nyce cas” は非常に

効果を出しており、Chaucer 自らが己れの物語をまとめているといっても過言ではない。他は *The Friar's Tale* の “Our Hoost tho spak, ‘A, sire, ye sholde be hende’ (1286) と *The Wife of Bath* の “This joly clerk, Jankyn, that was so hende,” (D629) の二つである。これを表にまとめると次のようになる。

表 I

	Nicholas	Absolon	Alisoun	Robyn	Gille	John	Gervys	T.
hende...	6							6
this...	8	8	1					17
this hende...	3							3
thou hende...	1							1
this nye...	1							1
this joly...		2						2
this amorous...		1						1
this joly love...		1						1
my...			1					1
hony-comb, sweete...			1					1
maister...	2							2
this sely...		1						1
daun...							1	1
thyn...		1						1
thy mayden...					1			1
何も付されていないもの	18	16	10	2		5	3	54
Total:	39	30	13	2	1	5	4	94

この表 I は興味深い資料を提供しているように思う。第一に John そのものの名前前は 5 回で何等指示形容詞もまた所有格もついていない。この表に出て来る主役はやはり Nicholas であることが知れるのである。人名が key-word となっているばかりでなく付加的かつ指示的に “this...” の強調がなされている。これは Chaucer 全体の作品について言えることであり、*Troilus and Criseyde* ではこの “this” の付加された表現は全体の構成の展開と深くかかわり合っている<sup>14)</sup>。John が少ないのは “the carpenter” そのものが使用されているからである。次のリストを見て戴きたい。

- ‘Carpenter’  
1. And of his craft he was a carpenter. (A

- 3189)  
2. *This carpenter hadde wedde newe a wyf,* (A 3221)  
3. But if he koude a *carpenter* bigyle.’ (A 3300)  
4. *This carpenter* awook, and herde synge, (A 3664)  
5. *This carpenter* was good til Osenay, (A 3400)  
6. *This sely carpenter* hath greet merveyle (A 3423)  
7. *This carpenter* to blessen hym bigan, (A 3448)  
8. *This carpenter* wende he were in despeir, (A 3474)  
9. *This carpenter* answerde, ‘What seystow?’ (A 3490)

14) 拙論 *Troilus and Criseyde* の文体 (11) 名工大学報第28巻 1976 pp. 39~49

10. *This carpenter goth doun and comth ageyn,*  
(A 3496)
11. *Quod tho this sely man, 'I nam no labbe,*  
(A 3509)
12. *This carpenter answerde, 'Allas, my wyf!*  
(A 3522)
13. *'Yis,' quod this carpenter, 'ful yoore ago,'*  
(A 3537)
14. *This sely carpenter goth forth his wey;*  
(A 3601)
15. *This sely carpenter bigynneth quake; (A*  
3614)
16. *This carpenter seyde his devocioun, (A*  
3640)
17. *Fil on this carpenter, right as I gesse (A*  
3644)
18. *Ther as the carpenter is wont to lye, (A*  
3651)
19. *Full prively after John the carpenter (A*  
3662)
20. *He rometh to the carpenteres hous, (A 3694)*
21. *This carpenter out of his slomber sterre,*  
(A 3816)
22. *For, what-so that this carpenter answerde,*  
(A 3843)
23. *They seyde, 'The man was wood, my leeve*  
*brother'; (A 3848)*
24. *Thus swyved was this carpenteris wyf, (A*  
3850)

このリストと Nicholas の展開を見ればこの *The Miller's Tale* の plot が理解出来るようになっている。特に大工が "sely" をともなって出て来る時そこには irony が流れているのを感得するのである。

### 【Ⅲ】

さて Chaucer はこの物語の題材を何処から入手したのであろうか、それは Dempster が指摘する如く直接の原典は認められない。ただ14世紀の Flemish Fabliau が Chaucer の話に一層近いことが認められる。もともと1928年に出た Aarne-Thompson の *Types of the Folk-Tale, No. 1361* とその類話においては主なる次のような三つのモチーフがあった。それは 1. 洪水 (The Flood) 2. 誤った kiss (Misdirected kiss) 3. 汚名を着せること (The Branding) の三つである<sup>15)</sup>。これらのモチーフをいかに組合せるのか——そこに Chaucer の詩人として感覚が生かされて来ることになる。この当時の人は、この

話を讀んだり、聞いたであろうことは多くの人々によって指摘されている。James Winny は *The Miller's Tale* の Introduction の中で "the story was part of an oral tradition during Chaucer's lifetime"<sup>16)</sup> と明言している。French などは1例としてドイツで Valentin Schumann の *Nactbüchlein* に "von einem Kauffmann der forchte sich vor dem Jüngsten Tage" があるとしている。French はまとめて次のように述べている。引用して見たい。

"Alarmed by a sermon preached at the village church, the merchant provides himself with a boat, which he hangs in the rafters of his dwelling and stocks with food, wine, and beer. Every evening, he retires to this place of safety, lest the flood, which he has been told will accomplish the work of destruction at the Last Day, find him unprovided in his bed. His wife, vexed at his desertion, consoles herself with a young clerk and encourages the attentions of the local blacksmith.

The latter arrives at her window one night while the clerk is with her and receives much the same welcome as that which is accorded Absolon.

He takes his revenge by means of red-hot iron, and the cries of "Wasser!" arouse the merchant from his slumbers and bring him crashing to the floor."

これに反して主人公がつまり "heroine" が "courtesan" であって、三人の男に同時にいゝ寄られる——三人とは粉屋と僧と鍛冶屋だというのだ。この "courtesan" は各々三人に各々違った時刻に家にやってくるように言われた。順序は粉屋が先きで次が牧師である。最後に鍛冶屋が来ることになっている。最初の粉屋は (せっかくの時を二番目の訪問者で乱されるのだが) 牧師が来たのを知った粉屋は天井から吊してある桶に身を隠す。牧師は彼女とたのしむのだがしだいに良心の呵責を覚え、説教し始める。神の罰として火と水によって全人類の滅亡がここに出て来るのだ。それを聞いた粉屋は驚く。そこへ第三の男、鍛冶屋が着く。女は家に入れないため、せめてもだ kiss をといてせがむ。女は尻を出して kiss をさせるが、それはとんでもないことになるというわけだ。間違った所に kiss をした鍛冶屋は怒って早速家に帰り鉄を熱くして戻る。再び戻った鍛冶屋に牧師が二

15) W.F. Bryant and Germaine Dempster: *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* Humanities Press 1941 pp. 106~123

16) James Winny: Op. cit., *The Miller's Tale* p. 8

17) Robert Dudley French: *A Chaucer Handbook* Appleton-Century-Crofts 1955 pp. 215~216

度目のいたづらをするが、それに鍛冶屋は思い切って熱い鉄を押しつける。次におこる牧師の“水だ!”という声で桶の中の粉屋はロープを切るということになる。

色々なタイプの話があるわけだが、Chaucer の *The Miller's Tale* にあっては前に述べた七人が登場することになっている。(1)と(2)と(3)のモチーフを巧みに織り混ぜたものということが出来よう。誰れでも耳になれている物語の場合にはその換骨奪胎は容易な事ではない。Chaucer は今迄に見て来た人物と key-word を使用し自由な世界を作り上げたという事が出来る。最後に“hende Nicholas”を中心に具体的に見てみたい。

#### 【N】

- 1) This clerk was cleped *hende* Nicholas.  
Of deerne love he koude and of solas;  
And therto he was sleigh and ful privee,  
And lyk a mayden meke for to see.  
(A-3199-3202)

“Nicholas” と呼ばれるこの学生は “secret love” なる事について十分すぎる程の知識を持っていた事になる。その学生は “a povre scoler” (A 3190) となっているが “bokes grete and smale” という持物から推察すると “povre” の逆でむしろ金持であることがわかる。Nicholas が最初から astronomy の技を持っていたという事は God's providence を覗こうとする——別な表現では覗きうる事が出来るということで“秘め事”としての“courtly love”に通じておることを示し、何度も出て来る“Privee”と一致していることになる。しかも Nicholas は “sleigh” なのだ。従って “meke for to see”——つまり「どう見ても」生娘のように「淑やか」なのである。実は物語が進展するにつれてわかるのだが反対なのだ。そこにおいて “hende” が彼に附されていることは正しく彼の性格を示していると判断出来る。O.E.D の ‘Hende’ 4 には “Pleasant in dealing with others; courteous, gracious: kind, gentle, ‘nice’, (Of persons; less commonly of speech, action, etc.). A conventional epithet of praise, very frequent in Middle English poetry.” とあるがとにかくこの語は Chaucer 特有の多義的な意味を含んでいる。“privee” についてもそうだ。“courtly love” もいって見れば男女の “sexual consummation” が結局の目的であるとするならばどんなに美化されてもそこにつきまとうのは “secret love” であって、“deerne love” が浮上してくることになる。

- 2) Now, sire, and eft, sire, so bifell the cas,  
That on a day this *hende* Nicholas

Fil with this yonge wyf to rage and pleye,  
Whil that hir housbonde was at Oseneve,  
As clerkes ben ful subtille and ful queynte;  
And prively he caughte hire by the queynte,  
And seyde, “Ywis, but if ich have my wille,  
For deerne love of thee, lemman, I spille.”  
(A-3271-3278)

さてこの物語の主人公の一人老 John の妻が如何なるものであるかが殊更に強調された後に出てくるこの部分は非常に面白い。若妻は18歳であり、“vitality” と “freshness” に満ちている。

Wynsynge she was, as is a joly colt,  
Long as a mast, and upright as a bolt.  
(A 3263-64)

とかまたは

She was a prymerole, a piggesnye,  
For any lord to leggen in his bedde,  
Or yet for any good yeman to wedde.  
(A 3268~3270)

といわれているのだ。“Wysynge” (=restless) といふ、また次の “Prymerole” (=primrose) とか “piggesnye” (a flower, a term of endearment) はこれ以上に説明の必要ない語である。この若妻と “to rage and pleye” (=to play about with her) を願い出したのである。彼の(1)にある “And lyk a mayden meke for to see” などのようなものでなく、その行動は粗野なのだ。大工が Oseneve に出掛けている間に遊ぼうというわけである。(2)にある “ful subtille and ful “queynte” は直訳的に “very subtille and sly” なのだがこの “queynte” は次行の “And prively he caughte hire by the queynte” とは呼応しつつも余りにも明け透けな言葉である。生娘のような淑やかさは何処えやら “hende Nicholas” は秘かに (これも実にアイロニカルなのだが) “queynte” (=pudendum) をつかまえた事になる。この響きが他に四度も使われている語に対してのイメージは強烈なものであろう。そしてはっきりと “For deerne love of thee, lemman, I spille” つまり「お前との秘め事が成就せぬならば、恋人よ、死んだほうがました」といっているのだ。

これは次の三行に結論が出されている。

Whan Nicholas had doon thus everideel,  
And thakked hire aboute the lendes weel,  
He kiste hire sweete and taketh his sawtrie,



And pleyeth faste, and maketh melodie.

(A 3303~3306)

ここにおける “the lendes” とは “queynte” と同じであり “maketh melodie” は思いがとげられたことを知らせている。

3) Somtyme, to shewe his lightnesse and maistrye,

He pleyeth Herodes upon a scaffold hye.

But what availleth hym as in this cas?

She loveth so this *hende* Nicholas

That Absolon may blowe the bukkes horn;

Hene hadde for his labour but a scorn.

(A-3383~3388)

彼女が Nicholas に “Ye moste been ful deerne, as in this cas.” (A 3297) といったのを見るとここに “ful deerne” が成立したことを意味する。そこで叙述は “joly Absolon” 移ることになる。Absolon は *Miracle plays* の Herode 王までも演じて見せる Nicholas の Alisoun に対するライバルであるが余り効果がない。Chaucer はここで格言を引用している。

Ful sooth is this proverbe, it is no lye,

Men seyn right thus, “Alwey the nye slye

Maketh the ferre leeve to be looth.

(A 3391~3393)

“Out of sight, out of mind” というわけである。“hende Nicholas” の優位な様を述べている。3388行の “彼のすべての所作は無駄な骨折りでしかなかった” といっているが本当にそうであったのか。contrast が良くあらわされている。

4) Now ber thee wel, thou *hende* Nicholas,  
For Absolon may waille and syng “allas.”

And so bifel it on a Saterdag,

This carpenter was goon til Osenay;

And *hende* Nicholas and Alisoun

Acorded been to this conclusioun,

That Nicholas shal shapen hym a wyle

This sely jealous housbonde to bigyle;

(A-3397~3404)

同じ屋根の下に暮している方がこの競争では強いに決まっている。本来なら例として A 3397~3398 は独立すべきだが、続けた。“thou hende Nicholas” ——これはまことに皮肉だ。Nicholas に呼びかけているからである。そしてここで John the carpenter は Osenay に

出掛けるのだ。この例の “thou hende Nicholas” と次の “hende Nicholas” は意味に変化をきたしている。“This sely jealous housbonde” の “sely” (ここでは ‘simple’ または ‘naive’ な意味にとれる) と対になり非常に強くこの例における “hende” には揶揄的な意味が入っている。ここでだけに *fabliau* はクライマックスに到達するのである。

5) So ferde another clerk with astromye;

He walked in the feeldes for to pry

Upon the sterres, what ther sholde bifalle,

Til he was in a marle-pit yfalle;

He saugh nat that. But yet, by seint Thomas,

Me reweth soore of *hende* Nicholas.

(A-3457~3462)

「本当は」と Chaucer はいうのだ “Men sholde nat knowe of goddes pryvetee.” (A 3454) と。この大工も “hende Nicholas” を気にかけることはなかったのだ。つまりお互に “privetee” を探ってはならないのである。Nicholas も John も知り過ぎたことになる。大工は同情するのだ。“This man is falle, with his astromye,/In some woodnesse or in som agonye./ (A 3451~3452). そして大工はこの例の最後の「おとなしい “Nicholas が可愛相だ」といっている。ここで直接的に Nicholas と関係が出てくることとなる。

6) And atte laste this *hende* Nicholas

Gan for to sik soore, and seyde, “Allas!

Shal al the world be lost eftsoones now?”

(A-3487~3489)

そして第二のノアの洪水モチーフが生かされてくる。人類の滅亡を予言された大工はなげくのだ。ここにおいて “hende” の意味が明確に “cunning” な要素を増して来る。何故ならば大工は畏を掛けられ、畏に落ちたからである。「しからばまずビールを持って来い、それからお前とおれの間だけで秘かに (privetee) 話して上げる」というのだ。“hende” を “cunning” と同じ意味だといったが “gentle” と “sly” が入り混じっているのである。

7) “Why, yis, for Gode,” quod *hende* Nicholas,

“If thou wolt werken after loore and reed.

Thou mayst nat werken after thyn owene

heed;

For thus seith Salomon, that was ful trewe,

“Werk al by conseil, and thou shalt nat rewe.”

(A-3526~3530)

Noah's Flood は今度の二度目では半分にも及ばないくらいだと聞かされて John はおどろく。

この例は大工の嘆きに連なっている。

This carpenter answerde, "Allas, my wyf!  
And shal she drenche? allas, myn Alisoun!"  
For sorwe of this he fil almoost adoun,  
And seyde, "Is ther no remedie in this cas?"  
(A 3522~3525)

例にある "hende" は "gracious" には違いないが、初めの "hende" とは完全に内容が異って来ている。そしてこの fabliau は頂点へと達して行くのだ。

- 8) Abak he stirte, and thoughte it was amys,  
For wel he wiste a womman hath no berd.  
He felte a thyng al rough and long yherd,  
And seyde, "Fy! allas! what have I do?"  
"Tehee!" quod she, and clapte the wyndow to,  
And Absolon gooth forth a sory pas.  
"A berd! a berd!" quod *hende* Nicholas,  
"By Goddes corpus, this goth faire and weel."  
(A-3736~3743)

"sely Absolon" の登場なのだが、これは Alisoun の窓辺で思いをとげるが大変な事になった。かくして "His hoote was coold and al yqueynt;" (A 3754) となったのである。かくして目覚めた "sely Absolon" は "hende

Nicholas" に報復することとなる。

- 9) Up stirte hire Alison and Nicholay,  
And criden "out" and "harrow" in the strete.  
The neighebores bothe smale and grete,  
In ronnen for to gauren on this man,  
That yet aswowne lay, bothe pale and wan,  
For with tha he brosten hadde his arm.  
But stonde he moste unto his owene harm;  
For whan he spak, he was anon bore doun  
With *hende* Nicholas and Alisoun.  
(A-3824~3832)

今一度引返した Absolon は赤くやけた鋤を借りて来るのだが、これを押しつける前の "This Nicholas anon leet fle a fart,/As greet as it had been a thonderdent,/That with the strook he was almoost yblent;" (A 3806~3808) によって Absolon は耐えたのである。大工は大工でこのあとの事で "水" を洪水と間違えるところに *The Miller's Tale* の本質があり、大工をいゝまかず Nicholas は "hende" なのであろうか。

この "hende" の意味の変化を *The Miller's Tale* の枠組の中において考える時、fabliau の精神と Chaucer の中世の規範から内容、言語共に新しい世界に展開しようとした事が知れる。これは Chaucer の人間味と円熟さに伴うものであり、文体的展開を知る上で貴重なものである。